

5. [医療と保健の融合による健康づくり拠点整備事業について]

掛合町会場（掛合総合センター）

Q1：昨年から反対意見が多く、新聞報道、昨年の市政懇談会の質疑応答からも、反対意見が雲南市民の総意ではないか。年間5万人の入場見込みは現実的か（実現できても毎年4～5千万円もの一般財源が必要）。市内の温泉類似施設は多いが、どれぐらいあるか幹部は場所や名称を言えるか。送迎も大変である。また、類似施設も多いなか、雲南市の果てから高齢者リピーターが来るのか。これが負の財産になると危惧する。健康増進に必要なものであれば全国に点在するはずだ。この施設の建設は止めることを考えていただきたい。

A：5万人の入場見込について、B&Gを始め市内外の施設利用分も集計して試算している。運営経費は5千万円が必要になるが、利用料収入だけでは賄っていけない。出雲、松江のように民間による経営はないので、中山間地域では行政が必要な施設として考えていく必要がある。平成28年度の建設に向け、必要性について市民の理解を得る活動をしていきたいのでご理解いただきたい。（健康福祉部長）

A：類似施設について、今計画しているものと同じものはない。温泉施設とは別物である。年間5万人の見込みについて、B&Gは月4～5千人（夏場のみ）あるが、利用者は加茂、大東だけではない。他市からの利用もある。このため、利便性がよくないと達成できないと考える。市内にある施設は、小規模で思う通りの健康予防の役割を果たさない。健康長寿、生涯現役は子どもの頃からトータル的な取り組みが必要である。

雲南市の国保の医療費も増加している。また島根大学の調査では、掛合、三刀屋の高齢者の80%は足腰が痛いとの結果がある。これ以上そうした状況を増やさないために必要である。

必要ないとの声が多いのであれば、強引ではなく、時間をかけた話し合いをするなかで、市民が必要だと感じて、ご理解いただいた時点で建設を行う。（市長）

A：東御市を視察したが、痛いながらにどうやって動ける体をつくるかが目標。老人と子どもが、同じ空間で健康づくりを目的として過ごせることが互いにとってよい効果を生む。施設内には診療所があり安心できる。そうした部分で温浴施設とは意味が違う。予算があれば理想的な施設と考える。（病院事業管理者）

Q2：水中運動の効果は理解するが、波多からは遠過ぎる。移動に疲れない方法の検討が必要である。市内の移動が困難なのに、松江・出雲の利用者の取り込みの話ではないと思うので、便利な使い方を考えてほしい。既に、膝や腰に症状がある人が多いなか、この事業に理学療法士が関われるシステムづくりをしていただけないか。

A：交通手段について、利用される人のなかに出雲、松江から来ておられることを言うだけである。完成すれば、波多からでも利用しやすいよう巡回バスの設置を考えたい。既存の施設（ケポートよしだ等）とも連携しながら、同じメニューで統一的に利用ができるようアクセスの確保が必要と考える。（市長）

A：理学療法士の配置については、医療法の問題がある。保険診療では、そうした治療をしてもその施設でのリハビリのコスト算定ができない。理学療法士、診療医師がいるような施設にすべく、ランニングコストとの兼ねあいのなかで経営的な部分から煮詰めたうえで答えるべきと考える。（病院事業管理者）

A：東御市では、診療所医師の指導のもと、理学療法士、作業療法士から指導が受けられるが、これに近いものとなるよう、体制整備を考えていきたい。（市長）